■特集：公開シンポジウム

「国際的な文化発信と奄美・沖縄」

シンポジウム開催にあたって

鹿児島大学学長　永　田　行　博

みなさんこんにちは。シンポジウム「国際的な文化発信と奄美・沖縄」に先立ちまして，ご挨拶を述べさせていただきます。清成先生をはじめ４人の先生方，ご遠方からご多忙な中，おいで頂きましてありがとうございます。心から御礼申し上げます。

このシンポジウムは鹿児島大学の全学プロジェクトの研究成果を公開するものでありまして，今回で３回目になります。このプロジェクトは私の横に座っております山田法文学部長を中心にしまして，平成15年度から学長裁量経費を投入した鹿児島大学全学総合プロジェクト「島嶼圏開発のグランドデザイン――南西諸島における環境ガバナンス型地域政策」としてスタートしたものです。

この事業は，奄美群島および沖縄を含む南西諸島を対象に，文化・自然・人間・経済・情報・農学・工学等の諸領域について学際的総合的な研究を進めてきました。その成果を広く南西諸島の研究者に公開致しまして，奄美群島を中心とした島嶼地域との地域連携，また同地域への地域貢献を進めようとするものでございます。

第１回目は，平成16年１月に名瀬市において，「新しい奄美世界の創出」のテーマで開催致しました。私は基調講演をする予定でおりましたが，突然高熱になり，代読してもらうというような失態をやらかしました。その１回目はとても熱気溢れる議論が展開されたと皆様から，そして責任者の山田学部長からも聞いております。第２回目は平成16年11月に，沖永良部島の和泊町で開催されました。

今回は奄美以外の地ということで，鹿児島市で開催することになりました。本プロジェクトも３年目を迎えまして，３回のシンポジウムの開催，本館のロビー部分に展示してあります月刊誌「奄美ニューズレター」の発行，それから定例研究会の開催を継続して行い，着実にプロジェクト研究の成果を挙げてきております。成果の幾つかをご紹介しますと，第１回目のシン

ポジウムを記録しました「奄美と開発」と題するかなり分厚い単行本を，昨年12月に南方新社から刊行致しております。また，月刊誌の「奄美ニューズレター」は平成15年12月の第１号から今年11月の第24号まで刊行されており，奄美研究者にとりましては貴重な資料となっているのではないかと，自負しております。またニューズレターには毎回，３枚の美しい写真が表紙を飾っておりまして，それを見るだけでもこの事業の現地重視の姿勢が見て取れます。

今日はこの事業の総括ということで，それぞれ分野の異なる５名のパネリストの方々にご多忙な中においで頂きました。それぞれの分野からの切り口で，本日のシンポジウムのテーマである「国際的な文化発信と奄美・沖縄」について，大いに議論を深めて頂ければとお願いする次第でございます。

「奄美」は単に鹿児島県の離島の一部という位置づけではなく，世界の奄美と認識され，その文化・歴史・伝統が21世紀の新しい文化を創出する上で一つのパラダイムを作り出せるものと確信致しております。それを実現する為にも文化的な発信力を飛躍的に高めていく事を望んでおります。

今日のシンポジウムがそのような場となることを祈り，さらに今後奄美の更なる発展を願って，私の挨拶とさせていただきます。どうぞ最後まで熱心なご討議をお願いします。ありがとうございました。

■特集：公開シンポジウム

「国際的な文化発信と奄美・沖縄」

パネラー
稲村　公望(中央大学大学院公共政策研究科客員教授)
河田　真智子（島旅作家）
清成　忠男（法政大学学事顧問）
平田　隆義（名瀬市長）
山田　誠（鹿児島大学法文学部長）
コーディネータ
矢野　利明（鹿児島大学副学長）

【矢野】皆さんこんにちは。今回のシンポジウムのコーディーネートを勤めさせていただきます鹿児島大学の矢野です。にわか勉強で奄美を勉強させて頂いて，その感想は，「奄美は面白い」，この一語だったと思います。奄美の持つ国際性・多様性・ある種の独自性・受容性といったものがないまぜられているように思います。特に受容性については，第１回の名瀬で行われたシンポジウムにおいて，久留米大学の堂前先生が寄留商人の事に触れられています。これは廃藩置県前後から第二次世界大戦末期迄に奄美・沖縄の島々で経済活動に従事した他府県出身者の方だそうですが，その方達が島の街づくりをしたという話が出てきます。島にはよそから来た人も受け入れる受容性があるのだなと，非常に感動しました。

私自身はある種の偏見を持っておりました。島というのはよそ者は受け入れられないのではないかと思っていまして，実は私，鹿児島大学に来たときにこの種の体験をしたのですが，ある時から非常に鹿児島に受け入れられました。奄美も同じように受容性のあるところなんだな，という風に感じています。

今日は奄美の持つ魅力を国際的に発信していく為に，５人のそれぞれの分野で，活躍されているコーディーネータの方と議論を深めて頂きたいと思います。５人の方を私の左から順にご紹介させて頂きます。

最初に河田真智子さん。東京のお生まれで島旅作家，カメラマン，島愛好家の会「ぐるーぷ・あいらんだあ」を主宰されています。著書には「島旅の楽しみ方」「南の島へ」「なつほの島旅」などがあり写真展等も開催されているということです。

次は清成先生です。東京のお生まれで東京大学経済学部を卒業されて法政大学で教授をされ，1996年から法政大学の総長を2005年までされています。先生は，大学基準協会の会長さんをされ，それから日本私立大学連盟の副会長さんなども歴任されています。皆さ

んもご存知かと思いますが，日経新聞に今年の８月から「青春の道標」が16回連載されていました。私もずっと読んでおりました。

次は，稲村公望さんです。稲村さんは今年３月に郵政民営化に反対されまして，日本郵政公社理事を退任されています。徳之島のご出身です。沖縄郵政管理事務所長，沖縄振興策の企画立案に参加，大臣官房審議官，政策統括官等を経て，現在，財団法人電気通信普及財団の理事長をされています。埼玉大学でも教鞭をとられていました。今日は中央大学の名刺を頂きました。国際レベルを含めて色々なところで活躍されているお方です。

その左は平田さん，名瀬の市長をされております。中央大学法学部政治学科を卒業され現在，名瀬市長３期11年目を迎えられております。地域力と民間活力を促進する為，「市民との協働」を掲げ，市民と行政が一体となったまちづくりに取り組んでおられます。

最後に，一番左の山田先生です。先生は私と同じ四国のお生まれですが，お隣の香川です。大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程を単位取得後退学されて，現在は法文学部長をされています。今回の鹿児島大学の「島嶼圏開発のグランドデザイン」の研究代表を務められておりまして，このシンポジウムの中核として仕事をされております。以上のパネリストの方に，今日はいろんな切り口から自由な討議をしていただきたいと思っております。宜しくお願い致します。

最初に，山田法文学部長から本シンポジウムの開催の理由といいますか，鹿児島大学の全学総合プロジェクト「島嶼圏開発のグランドデザイン――南西諸島における環境ガバナンス型地域政策」の目的や目標，これまでの取り組み，そして経緯・成果等について５分程度でまとめて頂ければと思います。宜しくお願い致します。

鹿児島大学法文学部と奄美

【山田】皆様こんにちは。山田でございます。５分間で３年の活動の総括をせよという難題を押し付けられております。頑張ってみたいと思います。今年度当初は関西でシンポジウムを開催する計画でした。準備の課程で壁にぶちあたりまして，これを断念致しました。パネリストの方々には当初その約束でお願いし，ご了承いただいていた訳で大変申し訳ございません。

〔奄美サテライト教室〕

法文学部とその大学院は，この３年間，奄美の教育・研究に大きなエネルギーを集中してまいりました。その一つは，奄美で現在も進行中のサテライト教室という大学院の分校に近い授業形態でございます。これは何とかしてもう少し拡充をしたい。来年度ももう一箇所なんとか徳之島に作れないかと，準備をしているところでございます。

〔奄美のマスコミ論〕

これは少し脈絡が異なるのですが，大学の学部授業におきましても，法文学部は新しく２つのマスコミ論を開設しております。そのうちのマスコミ論Ⅱは奄美のマスコミを素材にして授業を展開しております。事実上，学部学生向けの奄美論になっていると理解をしております。

〔島嶼プロジェクトの狙い――経営的なソフト〕

そして三つ目が先ほどから何度もでており

ます全学プロジェクト「島嶼開発のグランドデザイン」です。本年度は締めくくりの年度になっています。

当初，プロジェクトの狙いは，次のような点にありました。奄美には各種のハード事業が投入されているけれども，それが上手く活用されているか。それを活用する為にはもっと経営的なソフトを考えなければならないのではないか。

更には，今迄以上に環境というものをシビアに考えていかなければならない。

それと同時に，やはり何よりも島に生活している人々が今よりもっと楽しい生活が送れなければならない。

そんな事を同時に解決できるかどうかの検討に挑戦してみたい。大胆不敵にも私共はこういうふうに考えまして，プロジェクトに取り組んだ訳でございます。

〔アイディアの１つ――黒糖ビール〕

それでは，この３年間でどんな目に見える成果が出てきたかと言いますと，今，黒糖ビールというアイディアが出ておりまして，目下試作中でございます。ただ，いくつかの新しい取り組みが登場しているとしても，注目すべき程の大きなインパクトを与えられたかというと，残念なことに，まだまだそれほど評価してもらえる状況ではないと，反省しております。

先ほど学長も言われましたが，確かに私共の「奄美ニューズレター」は大学のプロジェクト組織としては，考えられない成果だと思っております。しかしながら，住民の方々を含め，広く認知されるような成果をあげてきたか，という点では反省する部分がある。

〔地域振興の柱――新たな観光〕

具体的な例をとり出せば，この間，文化，もっと申し上げますと観光というものに地域振興の柱が移ってきたのかなというふうに思っております。それは全国的にそういう傾向があるわけですが，この動きと連動して奄美の名も次第に国民の間で認知されてきたと思います。しかしながら，国際的な知名度を考えますと，沖縄にはとても比すべくもなく，まだ奄美というのはとても外からは見えにくい存在ではないか。それでは，沖縄との違いを明確にして奄美を売り出すにはどうしたらいいか。この局面は，本プロジェクトでそれほど力を注いできたわけではありません。

〔奄美の文化を強調したい〕

やはり奄美の文化というものをもっと強調すべきではないか。これが，今日こういうテーマでシンポジウムを開こうと思い立った背景でございます。会場にお集まりの方々の力をお借りして，それが成果のあるものになればありがたいと思っております。宜しくお願い致します。

奄美の島々の魅力

【矢野】どうもありがとうございました。山田先生のほうからは，奄美のハードの事業よりもソフトな事業の面に地域振興の重心を移したらというご提案がありました。次に５名のパネラーの方お一人５分程度ずつ，それぞれの立場からみて，奄美とその魅力について語って頂ければと思います。河田さん，最初にお話して頂ければと思います。宜しくお願い致します。

〔奄美の魅力――心の温かさ〕

【河田】河田真智子です。私は大学１年の時に沖永良部島に初めて行きまして，そこの人にとてもよくして頂きました。農家に泊めて頂いて，また帰る時には船まで見送ってもらって，「またおいで」と言われました。旅行者の身にあって，またおいでと言ってもらえるような旅をしたことは初めてでした。それ以来，沖永良部島には21回，奄美大島に24回行っています。その出発点は大学生の時に遊びに行って，「またおいで」って言ってもらった。そして２回目に行ったら「ほんとに来た」

とびっくりされ，三回目に行ったら「おかえり」と迎えてくれました。

およそ300の島をまわっておりますが，そんなふうに言ってくれる島ってなかなかないです。それが人の温かさ，それが奄美の島々の魅力ではないかなと思っております。簡単ですけど以上です。

〔奄美の魅力――ソフトパワーの源としてのオープンな文化〕

【清成】清成です。こうした文化発信は結局，最近の言葉で言えばソフトパワー。外にどう伝えるかということですね。ソフトパワーという言葉はジョセフ・ナイという人が使い始めた言葉でして，ハードパワーと対になります。ハードパワーは典型的には軍事力です。力だけではなくてアメと鞭ということも当然あるわけですが，これに対してソフトパワーというのは，相手に押し付けなくても相手が自然にこちらに魅力を感じて従ってくれる，ということですね。

ソフトパワーが強ければ強いほど，多分，世界中でその国，あるいは地域に対するファンが増え，魅力を感じて近づいてくれる。それから，考え方にも同調してくれることになるのです。こういうソフトパワーを各地域が作り出す，あるいは伝統的に蓄積されているものをどう活用するか，なのだろうと思います。

今，河田さんから，奄美は外に対してオープンだということが指摘された訳ですが，私のフィールドは実は，奄美よりもどちらかというと沖縄であります。沖縄の宮古・八重山で島興し研究交流会議を６年ばかり続けたのですが，これは完全に民間の運動でして，地域に新しい生活文化とか物産を作ろう。それも内発的に，外から何かを持ってくるのではなく，中の資源を活かして作ろうという運動をしたわけであります。

地域に溶け込んで馴染んでもらうまでに３年はかかりました。やはり１面，排他性があった。また，沖縄の場合は地域的に重層構造と言いますか，縦の差別というのもあるわけです。それと対照的に，奄美の場合は非常に外に対してオープンで，人を迎えいれるということが特徴なのだと，強く感じたわけです。実は沖縄の経験からもう少し言いたい事があるのですが，次の発言の機会にしたいと思っております。

【稲村】私は奄美の徳之島の出身でございますから，当然，懐かしい，自分のアイデンティティの基本だということで，誇りに思うわけです。それを前提として，少し違った話題を提供してみたいのです。

例えば私が初めて鹿児島に参りました時は，250トンの船で参りました。今日は東京から１時間半ほど飛んで来ました。大阪からも奄美大島への飛行機は飛んでいるし，もちろん，貿易量，交易量，エネルギーの消費量も，当時と比べ物にならないでしょう。ただ，それでいいのかという話を申し上げたいわけです。

〔市場原理主義だけでいいか〕

世界的にも市場原理主義で経済が全てだと

いう風潮になっています。貧富の格差も構わない，国民国家の力の差もどうでもいい，というようなことでやっています。確かに中国とかインドとか，ブラジルとか，経済的にある意味で成功したところもございますが，いろんな矛盾がでてきているように思います。

同じことが奄美，私のふるさとについてもあるような気がいたします。日本全国に共通する問題の一つでもあります。例えば地方の切捨てです。経済が落ち込むと，小さな所は切ってしまえ，というような動きでございます。例えばトヨタ自動車はレクサスという立派な車を作れる。それを作って輸出するというのが日本の富の中核と位置づけられる。

〔地域の多様性が日本を支える〕

けれども，そうしたビジネスの成功だけを目指す場合には，効率さえ良ければ宜しいという考え方が非常に蔓延してきて，小さな文化や違いは要らない，とみなされるようになる。奄美という小さなところを失ってもなんら痛くも痒くもない。しかし，本当にそうだろうかと思います。

私が海外に旅行をするとき，特に東南アジアに向かうときに，徳之島や奄美は飛行機の上からぽつんと見えるのですね。しかしながら，それは小さな島であっても，立派な島だと，その島を残す。このことがむしろ資本主義やビジネスや民主主義や，そうした価値観が安定する方向に向かうのではないかと，最近では考えております。

〔テクノロジーの可能性――距離の克服〕

いくつもある話題のうち，特にテクノロジーの事を申し上げたいと思います。テクノロジー，技術，これは両面諸刃の刃でございますが，それを使って距離を克服するという必要はございます。チャンスはそこにある。新しい雇用もつくれるし，新しい改革もそこでできている。もしかしたら17世紀以来，薩摩藩の支配下にあった奄美も，もっとイコールでオープンでのびのびとする時代を迎えられる可能性があるのではないかと思います。

さらに，沖縄は基地問題もかかえていますが，観光も500万人ですか，大規模になっております。観光産業自体は低賃金労働の産業で，私はもっと付加価値の高い産業の立地が必要だと考えているほうでございます。しかしながら，大勢の観光客が来れば，いろんなマイナスの点を克服しながら貧富の格差をなくすといったチャンスも出てまいります。

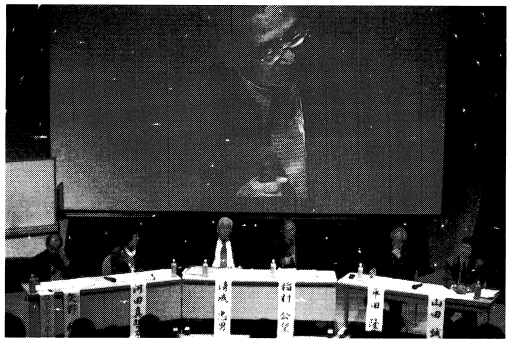
〔環境保全――亜熱帯地域の特性〕

もうひとつは，環境の問題でございます。環境のサステイナビリティーを外しますと，全てがなくなる。例えば東ヨーロッパ，共産主義の支配下の国々は，どんな公害がでてもどんどん工場化を進めた時代もございました。日本でもそうです。水俣の事件とか。幸いに奄美はそうした工場に汚されていない環境が残っている。それを活かして，アイデンティティを小さなナショナリズムにするのではなく，奄美が一番だと言うのでもなく，隣の沖縄と連携する。さらに隣の台湾と連携する。あるいは，ヨーロッパなどと連携する。それを実現するために，テクノロジーを使うこともできるのではないでしょうか。

私たちの先輩は貧しい時代に，日本全国いろんな所にいきました。カリフォルニア州にも行きましたし，ハワイやブラジルにも行きました。どこかの県で市長さんになられた方もおられます。そうした進取の気持ちで，奄美の亜熱帯地域の特性を生かして，混乱する日本あるいはグローバライゼーションで非常に心がすさんだ世界に対して，ある種の提案ができるのではないかと考えております。長くなりました。

【平田】名瀬市長の平田でございます。市長に就任して11年になりますが，その前に市会議員として３期10年間勤めておりました。この間に時代も大きく変わったし，私達をとりまく環境も変わったのではないかな，と思

います。



〔奄美の自然〕

奄美というのは，大体，地勢的には北緯27度から30度ぐらいの間の島嶼になる。そして，この地域は亜熱帯地域という位置づけができる。地球儀にこの緯度を移しますと，奄美群島とフロリダが植物群生に恵まれていますが，あとは殆ど砂漠地帯だそうでございます。そういった点で，特異性のある島嶼ではなかろうかと，思っております。

年間の平均気温は21度，冬でも気温が下がっても７，８度という事です。夏は気温が上がっても33度，街中でね。まあ，そういった点で温暖な地域という事で，人間性も温暖なのかなと思っております。

〔奄美の歴史〕

これまで，最初は大和朝廷の支配下に置かれていた。次に琉球王朝の時代があり，その次に島津の支配下。そして，明治以来，鹿児島県であるわけですが，不幸なことに，第二次世界大戦の終結後，昭和21年から28年まで，アメリカの統治下に置かれており，非常に孤立した時代だったかと思います。その後復帰を遂げて，正真正銘鹿児島県になっておる訳です。

〔奄美の開発〕

復帰後は，奄美群島復興特別措置法が整備されて，重点的に整備が進んでおります。これがいわゆる開発行為に繋がっているだろうと思います。この開発行為という事では，よく議論されるのですが，地元に住んでおられる人たちからは，早く港湾や道路をちゃんとしてくれ，飛行機を飛ばせるようにしてくださいということで，今日まで進んできました。そして，もちろん教育施設，小中学校，義務教育の学校施設の整備，それから住宅の整備も併せて進んできておりますので，生活環境はそれなりに恵まれておると思います。

〔名瀬市の特性〕

名瀬市の例をとりますと，鹿児島市を小さくしたような場所かなと思います。周辺の島々から人が集まってきて，都市を形成しております。生活環境についても大変便利な所でございますから，本当に生活のし易いところだと思います。

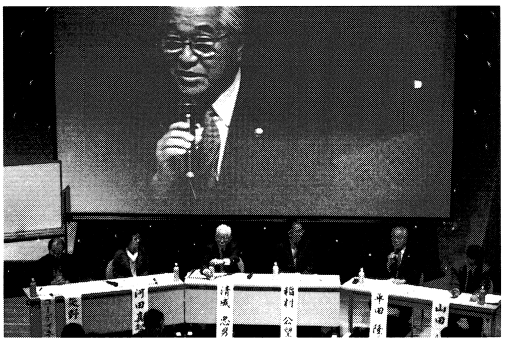
名瀬市の場合は少々の日照りが続いても，干ばつに襲われても，飲料水がとだえないダムが出来ています。また，恐らくご存知ないと思いますが，名瀬市の下水道普及率は93％でございます。これは離島では考えられない自慢してよい生活環境だと思っております。そういう環境の良さを勝ちとったわけですが，今の時代になって，それぞれがもってきた文化を大事にしていくことが問われています

先程申し上げました奄美群島の特別措置法ですが，近年は５年刻みの改訂をしているところです。奄振法についていえば，米軍の統治下に置かれて復帰するまで日本の経済的な発展から切り離されてきた。復帰に伴ってその遅れを取り戻すというのが，この法の趣旨であります。50年もたって復帰に伴う遅れは無いだろうということで，今次，法延長が大きな問題になりました。

〔地域資源を活かした島興し〕

そして，これまで地域の人たちにとって不利だというイメージで捉えられていた諸要因が，今になってみれば，有利性ではないのかなという議論になった。そこから，法の中に地域資源を生かして島興しをしようと。その地域資源というのは，動植物はもちろんですが，生活文化のような領域もそこに織り込ん

で，今後島を活性化していく。これらの議論を踏まえて，新たな法律のスタートを見たわけです。有利性を活かす取り組みも島ではいろいろ問題を抱えております。開発行為によって珊瑚礁が死滅したという議論も一方にはある。それから，交通の便がよくなりますと，植物の中に外来種が入ってくる。これまた大変だなと議論をしているところです。



〔北と南の文化の混在地域〕

こうした問題状況のなかで今後の島のあり方が問われているのではないかと思います。先般気づいたことですが，奄美大島と申しますと，沖縄県であろうと受け止める方が，本土にはまだ多くおります。沖縄県だと思っておられた人は，奄美大島に足を運んで，「あれ，これは鹿児島県ですよね」と申されます。その一方，鹿児島県に所属するのだと思って奄美にはいられた方は，「いやこれは沖縄ではないですかね」というような表現が出る。

北と南の文化が地域の中で混在していて，今日の奄美の特性が生まれていると思っております。この特性をどう生かしていくかに関しまして，今日のシンポジウムで先生方の意見をお聞きしたいと思って参ったところです。少々長くなりましたがお許しください。

【矢野】それでは最後に山田先生，お願い致します。

【山田】奄美の魅力というと，先程の河田さんと共通するのかなと思っておりまして，やっぱり対等な目線で，温かく迎えてくれるという事が大きいと思っています。大学の教師をやっておりますと申しますと，みなさん，へへーっとかしこまって下さる。でも，そうした態度は表面だけで，夜の飲み会になってくると，皆，対等だなと感じます。それと，南西諸島というのは世界の同緯度の中で特異なところではないかというお話が市長からございました。気候や自然環境の面で見ますと，南西諸島はきわめて類似性が高いと思っております。

〔対等な目線，平等な社会，奄美〕

しかるに，社会に目を向けて，先程申し上げました対等な目線を別な言葉で表現すれば，同じ南西諸島にあっても奄美は極めて平等な社会ではないか。この平等な社会というのは，日本の中でそう至る所にある構造ではないと思っております。じゃあ，なぜその奄美にそういう平等な社会というものがうまれ，そして，今日まで続いてきたのかということは，ほとんど解明されてないのではないかと思います。３年間の本プロジェクトは終わってしまいますが，この点で，チクッと心が痛むような思いでございます。

【矢野】どうもありがとうございました。皆さん５人の方に，奄美とその魅力と特異性等について語って頂きました。次に，今日のテーマが国際的な文化発信という事から，奄美の国際的な認知度を高めていく為のセールスポイントは何か，そして具体的にはどんな取り組みをすればいいのかについて，島愛好家の会の活動をされている河田さんに語っていただければと思います。

離島苦という言葉を知らない世代への期待

【河田】私は沖永良部島に行ったのがきっかけで，島ばかり行くようになり，島にかかわるいろんな仕事をしてきました。テーマは島。

いろんな媒体で島について語り，伝えるというような仕事をして，もう30年近くになります。

〔若者に島の魅力を語る〕

では一体何をすれば，自分にとってではなくて島にとって，若い頃にお世話になった島にとって，よいことなのだろうと考えました。今の島にいる若い人達は高校を出ると必ず一度は島を出ます。その高校生に向けて私が若い頃に島で教わったことを，それは島の魅力，島って何なのか，島の誇り，全部私が若い頃に教わったこと，それを伝えることができれば，長い時間かかるかもしれないけれど，それが島にとってよいのではないかと，考えました。

たくさんの回数は行けないので，年に一回沖永良部高校を訪問する。そこで，授業の教室に入れてもらって，出前授業をするということをしております。去年からし始めて，今年２回目です。最初に校長先生にお願いした時に，私の想いを伝えました。島がよくなっていくには，島を出て行く人が自分の島を好きだと思って出て行くことができる，それが良いのではないか。それは，教えるということではなくて，実際に，体験した一人の旅行者がどう思ったかを，メッセンジャーとなって伝えることではないかと思います。

私はぐるーぷ・あいらんだあという愛好会をやって，大げさではなく少しずつやって27年になります。高校に来て授業させていただくのも，年に１回しか来られないので，最低10年は続けさせてくださいと，校長先生にお願いしました。島のために自分にできるのは，そういう事かなと思います。だから，ここにいる方も是非，島へ行ってみていただきたい。それが出発点ではないかなと思います。

それから，島が何かを発信していけること。その為には何が必要かなと思った時，一つは島に住んでいる人が，「自分の島を好きだ」と思って島を出て行ける事です。高校生と話してすごく分かるのは，実は私達の世代とは別世界に住んでいることです。

〔離島苦という言葉を知らない世代〕

私が学生の頃には，離島苦という言葉がありました。離島は苦しい，いろいろな面で条件が不利，遠い，台風が来る，水が無い，船が欠航する，だから離島は苦しいのだという言葉があった。でも，今の島にいる子たちは，島が大好きです。離島苦という言葉を知らない。その子たちが，自分達の島をいい島なんだと伝えるメッセンジャーになっていったらいいのではないかと思っております。

もう一つは技術的な面で，もう少しインターネットが使いやすくなり，自分の島のことを伝えられるといいなと感じます。例えば，空港やホテルにあるような，自由に使えるパソコンが郵便局にあったりすればいいな，と思います。そして島が好きだ，それを誇りに思えることが大切です。そういうことを育てていく為には，是非，ここにいる方に，一度島に行っていただきたい。それが一歩かなと思います。

奄美の生活文化と教育力

【矢野】ありがとうございました。パネリストの先生方には事前に私の方で，発言の順番を作らせていただいたのですが，今のお話との絡みで少し，順番を変えさせていただきます。河田さんの方からですね，若者に島の魅力を，若者自身が感じ取って，そしてそれを発信していって欲しいというお話がありました。最初に奄美の温かさのご発言がありましたし，稲村さんご自身も島に対する誇りをというご発言がありました。

この豊かな奄美の生活文化。やはり，これが貴重なセールスポイントではないかと思います。その為にはやはり地域における教育力も必要ではないか。そこで山田先生に，豊かな生活文化を持つ奄美における若者の教育力

というような点でお話しいただければと思います。

【山田】難しくて重たい話題を頂きました。どちらから入ろうかと迷いますが，地域の人々の教育力と絡み合う活動として，２つの事業に取り組んでいます。

〔地域の教育力の再発見〕

一つには，先程申し上げましたように，大学院のサテライト教室というものを開かせて頂いております。社会人の方々にいろんな意味で島を客観的に認めて見つめていただく。そして，今後どうしたらいいか一緒に考えていく。こういう教室を開いているわけですが，実際にはなかなか受講生を集められないで，苦闘いたしております。それで実は，文科系の学問だけではなくて，いろんな意味で鹿児島大学の総力を結集したサテライト教室にしていくという取り組みを今始めているところでございます。

もう一つは，私，河田さんとアプローチは違うのですが，結果的に似たようなアプローチをとっております。

最近，高校から出前授業をやれというご要望が沢山ございます。年輩の教師が行って喋るよりも，やはり島の若い人たちに，ついこの前まで同じ様な高校生であった人たちの生の意見や声を聞かせようと，この３年間，ゼミ生をつれて奄美の高校で話をさせております。

実は奄美の高校生が大学生と話し合う機会が少ないという事で始めたことですが，結果的にはうちのゼミ生が一番勉強になっているのではないか。実際に行ってみて，高校生といえども色んな事を考えているんだな，自分が高校のときそんなに考えていたかな，という反省材料をもって帰っております。ここにかなり学生の皆さんがご参加頂いておりますが，２月には２冊目のパンフレットができるはずでございます。彼らの声が反映されたパンフレットです。どうぞ，たくさんの方にお読みいただければと思っている次第でございます。

私どもは公的な組織です。その公的な組織が持っている力というものを発揮して，私どもが奄美に何ができるかを一緒に考えたい。その一つの試みをお話しさせていただいたわけでございます。

〔豊かな生活文化――奄美と沖縄〕

これからが本題です。豊かな生活文化，これを奄美の方々が気づいていない。この点をどうとらえるかを会場の方々とも一緒に考えて行きたいと思っております。よく申し上げるのは，沖縄と奄美は文化的に違うのではないか。根っこは一緒かもしれないのですが，違うのではないか。沖縄はなぜあれだけ，観光客が増えていって，稲村先生がいわれておりました500万人という大きな数字になるのか。それは，見せる文化があることも大きな要因ではないか。

〔見せる文化〕

見せる文化とは何なのかと申しますと，起源は王朝にあって，王様や貴族の前で見せる文化が中心にあったのではないか。奄美はそれと対照させると，何事も生活文化ではないか，というふうに思っております。

その一つの典型的な例が，大学院生の西元君に研究をしてもらっているシマウタです。彼も調査しながら確認しておるわけですが，シマウタというのはまさに生活そのものですね。坪山さんがそういう風に書いておられます。仕事をしながら，ウタの練習をする，あるいは口ずさむという事でございます。それから，嬉しい事，悲しい事いろいろあると，シマ（集落）の中では会合が開かれます。そこで歌われるのがシマウタです。

その場合に一番いいシマウタというのは何なのかというと，即興でやり取りをする。そのときの悲しい気持ちだとか，嬉しい気持ちだとか，感動したことを一方が問いかけて，

一方が応える。それがシマウタだと聞いております。聞きかじりですが，そういう文化スタイルが奄美の主要な部分を構成しているのではないかと思います。すなわち，見る側と歌ったり踊ったりする側とが分かれていない状態。皆平等だという社会というものは，現代の日本の中ではすごくめずらしいのではないか。

〔奄美の包容力〕

同時に今，よく全国的に癒しブームとかいう言葉がございますが，あの癒しというのは何なのだろうか。少し考えてみると，よく分からない。しかしながら，人と人とが同じ様に心を通い合わせるかどうかが根っこにあるだろう。その点でいうと，奄美というのは地域全体でそんな大きな包容力がある。そこに何か商業媒体が入ってきますと，伝え方は多少なりともゆがんでくる。それからもっと気にかかることは，奄美の方々自身がその魅力と，それを守っていく大変さに気づいていないのではないかという点です。これらのポイントが奄美らしさを売り出す上での一つの鍵になるのではないかと考えております。

奄美と沖縄の生活文化の違い――地域資源としての歴史・文化

【矢野】ありがとうございます。奄美の豊かな生活文化，そして奄美と沖縄の違い。これは私もニューズレターで勉強させてもらいましたが，桑原先生が書かれた軍政下のレポートがあります。アメリカの人類学者が来て調査された。彼が東京から沖縄にいったら，そこには日本ではなく外国があった。沖縄から奄美に船で行ったら，そこには日本があったという文章を書かれていたかと思います。奄美と沖縄の違いを短い言葉で印象深く表現しています。その一つに，山田先生がおっしゃる平等さというのがある。それが奄美の温かさになっているのではと，よそ者としての私は感じておりました。以前に，1975年ごろは奄美と沖縄で観光客が同じくらいであったという資料を見せていただきました。現在はなぜ奄美と沖縄の観光水準や動向が違うのかといったところを，沖縄振興審議会の会長，あるいは国土審議会委員の立場で見てこられた清成先生から，ご意見をいただければと思います。

【清成】私は沖縄の観光というのは，実はあまり感心していないのですね。課題もあると思っております。先程，島興し研究交流会という話をしました。これは一体何かといいますと，沖縄と奄美に共通なところがあるのですね。

〔沖縄と奄美――弱い第二次産業，県際収支の赤字〕

それは，第二次産業が弱いのです。存在する第二次産業も軽工業で，付加価値がそんなに高くないものが，特に沖縄の場合は多いわけです。そうすると，沖縄から県の外に売るものは，あまりたいした物でないですね。他方，自動車でもカラーテレビでも外から買うわけです。そうなりますと，県際収支というのは大幅赤字になる訳です。赤字を何で埋めるかというと，財政資金ですね。それから観光で埋める。つまり，外から入ってくるお金で埋める。財政資金の場合は，公共投資と基地収入ということになる訳です。この公共工事をやるとしても，セメントも無いし鉄鋼もない。したがって，本土から買わなければならない。折角投入された金が，やっぱり外にでてしまう。ザル経済なんですね。復帰後の

第一次振興計画として製造業の企業誘致を考えたわけですね。しかしながら，一社も来てくれなかった。にもかかわらず，石垣島には観光産業が本土から出てくるわけですね。これは環境破壊にも繋がるということです。

〔石垣島の青年達の島興し運動――地域の相対化〕

そこで石垣島の青年達が島興し運動というのを始めたわけです。「なんとか興し」という，これは心興しという事なんですけど意識改革を始めたわけでね。我々はそこに着目したのです。彼ら青年達の産業興しを手伝おう。

そのために，どうすればいいかというと，地域の資源を活用しなければいけない。地域の資源を活用する場合にも，外の目で見て，地域を相対化してみると地域のいい点悪い点がわかってくるわけです。外から行った人たちは，外の目で地域を客観的に見ますから，いろんな点に気がつくわけです。地元の人たちが気がつかないようなところに気がつくわけです。地域の交流にはそういう役割があるんです。柳田國男によれば，こういう役割を果たしたのは山伏とか行商人とかであったそうです。たとえば，ある山の中の集落に行って発見をする。また，外から入っていった人たちも，その地域の人たちと交流することで刺激を受けるという事なんですね。

〔地域間交流のメリット〕

我々が産業興しの取り組みを支援するためにどうしたかというと，例えば北海道の十勝ワイン。これは行政がワイン造ったわけですが，その中心人物を連れて行くのです。冬に八重山に連れて行くのです。西表島の地元の人たちは，観光客が来るには来るけどみんな石垣島に泊って日帰り観光で帰ってしまうと不平を言う。だからトイレ観光だというわけですね。そうしますと，北海道の人は，我々の町は観光客なんか一人も来なかったとやり返す。黙っていたって来るじゃないか。今プラス20度だけども自分のところはマイナス20度で，40度の気温差が有り，いかに恵まれているか。文句を言う前に少し考えろと，いうわけですね。その一方で，北海道の人も地元との議論を通して，北海道のいい点を改めて思い起こすわけですね。私はそれを虫干し効果だと言っています。ずうっと北海道内にとどまらないで時々，暖かいところに来て少し虫干しをしたらどうかと。彼らは10数万円の旅費を使って自弁で来てくれるわけです。そうやって，全国で産業興しした人たちを連れてくると，双方にメリットがあります。

〔地域資源の活用――漂泊と定住〕

これを社会学者の鶴見和子さんは漂泊と定住と言っているんです。漂泊している人たちが一時期滞在すると，いろんな事に気がついて提案でき，定住民も刺激を受けるわけです。こういう手法で沖縄に産業を興そうと取り組んだわけです。そうしますと地域資源を活用する。実は，先程市長さんからご指摘があったように，人間が利用したらなんでも資源になるのです。歴史だろうが，伝統文化だろうが，芸能だろうが，そこの出身の著名人であろうが，なんでも利用したら資源になるんですね。従って資源マップを作って少し議論をしてみるとか，昔は資源だったものが今は資源でなくなっているとか，それから，逆のケースもあります。地元に有るものをどう使うかによって，資源というのはどんどん作れるのです。

〔沖縄マキシマム論――自分達の資源は何か〕

我々が取り組んだ島興し研究交流会議というのは，昭和53，４年なんです。その頃の沖縄では本土との格差是正をという議論ばっかり盛んでした。我々はそうではないのではないか。それは沖縄ミニマム論だ。そうではなく，沖縄マキシマム論をやったらどうかと主張したわけです。他人の後姿を見ないで，自分達の資源を活用して産業を興したらどうかと。それは先程河田さんも違った次元で非常に時間がかかったとおっしゃったわけですが，

すごく時間がかかる。目に見えて産業が興ったのは２つか３つにすぎませんでした。しかし，それから20年たった今ですね，小さな産業が沖縄の各地にたくさん出来ております。ですから，20年ぐらいの時間がかかったのです。しかも，県際収支のマイナスを消すほどの事では，もちろん無いわけです。

しかしこれから先程のソフトパワーを中心に据える。ソフトな資源というのを人工的に作っていく。ＩＴ産業のコンテンツとかに力を注ぐようになってくるわけですね。そういう意味で，われわれは，島興し研究交流会議というのは意味があったと思います。

〔グローバライゼーションの時代とその終焉の始まり〕

その後90年代になって，いわゆるグローバライゼーションの時代を迎えました。沖縄にしても奄美にしても，国境を前提にしますと辺境なんですね。ところが，国境を取っ払ってみると，フロンティアになるわけです。つまり，辺境の逆転なんですね。この時，辺境が逆転するには，何らかの中枢的な機能をやはり持たなければならないのです。これからは，それをいろいろ模索することが大切ではないか。そんなに大きな機能でなければ，地域に独自なしかけを提案できるだろう。このグローバライゼーションも従来は絶対的だと考えられていました。デメリットがあってもメリットの方が大きいから目をつぶろうかという話だったのです。

私は最近，グローバライゼーションの時代がどうも終わりつつあるのではないかと思っています。ブッシュ政権のやっている中国の覇権主義批判。これによってそのネイションステイトの概念をもう一回見直さざるを得ないようになってきている。これとの関連でＥＵの進行が非常に問題になってきている。それから，最近一種の暴力措置しての国家論がもう一回復活してきている訳ですね。まあ，そういうことを考えると，地域を見る視点がもう一回変わるのではないかということです。それだけ地域振興が難しくなってきたなと思う次第であります。だんだんと話しが長くなりますので，この辺で止めておきます。

奄美からの情報発信と地域主体のガバナンス

【矢野】どうもありがとうございます。清成先生から，歴史や伝統といったものも地域資源だということをお話して頂きました。この点で，奄美には文化を含めた豊かな地域資源があると思うのですが，これを奄美以外に情報発信していくには現在何が不足しているのか。その欠けている部分をいかにして補うのか。これについて徳之島出身で郵政省に入られて，情報通信行政にも携わられ，そして奄美を内と外の両方から客観的に見ることができるうえに，海外経験も豊富な稲村さんに語って頂ければと思います。

【稲村】日本が戦後，復活し世界の貿易国家として発展したというのは大きな変革でした。極東の島国だった日本がめざましく経済的に発展した。当時の日本も今の奄美や沖縄と同じように，市場との大きな距離というハンディがあった。それを克服して，経済的な成果を達成できたというのはあると思います。

〔鹿児島県庁と奄美の関係――奄振事業をどう評価するか〕

現在の奄美の場合，ハンディ克服の難しさに対する危機感は，頭の中にあると思うのですが，実際の問題になりますと，それほどの危機感がない面もあると思います。例えば，奄美に対する鹿児島県のガバナンスの問題ですが，県庁の出先機関である大島支庁というのがございます。こうした県レベルの統治方式がいいのかどうか。今一度，考えてみる必要があると思います。グローバライゼーションの時代に，従来のガバナンスのやり方がいいのかを検討する必要がある。その選択に際

しては，外部の人が決めるのではなくて，奄美の住民の方々が選択していくことが必要ではないかなと思うわけです。

奄美振興の事業計画も，復興計画からはじまって５回の計画が実施されましたが，マキシマム効果が出ているのでしょうか。その評価とかをしっかりやれば，沖縄のコールセンターで数千人の雇用規模を創出するケースと同じような事業立地も可能性として描けるのではないか。丁度，鹿児島の会場ですから申し上げますが，鹿児島はどちらかというと県という行政区域で，奄美を見ている様に思われます。個人的には鹿児島というのは，奄美の人にとってワンオブゼムだと思います。東京であり，仙台であり，ニューヨークであり，沖縄であり，台北であり，もしかしたら上海と密接な関係を築くかも知れません。奄美の空港に立ったときには，このように複眼的に視野を広げて，いつも奄美を見ております。従来の歴史の中で外からの支配の関係がございますので，それを克服するために，「狭い奄美が一番だ」とかいう考えは一切捨てて，もっとフェアに，オープンに，他の方々と接することの大切さを強調しています。

〔外部資本と環境問題〕

あと理屈っぽい話を致しますと，もう一つは資本の問題でございます。先ほど清成先生がおっしゃられましたが，観光で外からの資本が入ってきた時に，その収入が，収益がどこにもっていかれるかということについては深く考えなければなりません。単なる植民地みたいになることは避けなければなりません。実際にはバランスをとるのが難しいのです。企業を作る時に大きな資本市場に依拠するのか，あるいは環境などの厳しい規制の下で，周りの人々と調和的に事業を展開させるのかは大きな問題でございます。

奄美にはフィラリアという風土病がありました。この種の問題は大きな政府でなければ解決できません。公的な資金を投資しなければ解決できない問題です。しかしながら，ビジネスは，それとは違った性格だといえます。

〔小資本と世界を相手のビジネス〕

ビジネスは，大きいものから小さいものまでいろいろあるわけです。その小さな資本をどう活性化するのかというのは，やる気の問題も含めて非常に重要な課題だと思います。

現在のように，市場経済だけという風潮が高まるにつれて，小さな資本を活用してでも，自分たちのアイデンティティを強力に主張することは，ますます大事になっていると考えております。鹿児島だけじゃなくて世界を相手にビジネスを展開する。例えばですね，奄美からだって無料でインターネット発信できるんです。こんなことは問題なく出来る。それをやらない。公的な機関はサバイバルの意識が低いから，今までどおり，お金をもらえればいいやという考えもあるのではないでしょうか。

もっとも，私たち奄美の人間の場合は，多くの人たちが60年代に貧乏で人口圧力も強かったために外に出て行ってしまいました。今はもう帰るところもありませんけれども，そうした小さなビジネスを大切にする気風というのはまだ残っております。その気風が生活文化として残っているところは，大きな可能性があると思っています。いつも私は思うんです。鹿児島県の人には負けない。沖縄の方々にも負ける気はない。そういうハートを持ってチャンスを求めています。

奄美のアイデンティティ

【矢野】ありがとうございます。稲村さんから，大島支庁のあり方も含めて，県による従来のガバナンスではうまくいかないのではないか，あるいは小さな資本をどんどん活用するやり方で，奄美のアイデンティティを高めるべきだという発言がありました。

【稲村】ちょっと付け加えますと，沖縄は飛行機会社を自前で持っている。全部自前ではないのですが，自分たちの資本が大きな比重を占めている会社を持っている。ところが，奄美には無いです。鹿児島県が資金を出してくれないのかもしれません。

奄美出身者の親睦団体のパワー

【矢野】それではちょっと切り口を変えます。奄美の魅力を一番深くつかんでいるのは，奄美のご出身者ではないかと思いますが，奄美出身者で作られている島外の親睦団体等が，奄美文化の情報発信をする前進基地となり得るのでしょうか。平田市長。もしなりうるのであれば，どういう活動条件を整えればよいのかという点も含めてお話し頂ければと思います。

【平田】社会の有様が大きく変わって，ようやく前進基地に成りうる時代を迎えたのではないのかと。古い先輩たちは，「あなたは出身どこですか。」「九州です。」「九州のどこですか。」「鹿児島県です。」「鹿児島県のどこですか。」と問われて，ようやく「奄美大島です。」と答える時代があったのです。

〔東京のホテルでシマウタ〕

最近の若者は，あなたはどこですかって尋ねられて，胸をはって「私は奄美大島です。」と言っております。このことは大変大きな時代の変化であって，奄美出身者の方々が情報発信として大きな力になっていくと思っております。島外にいる出身者は，これまでシマウタとか踊りを控えていたのですが，今は奄美主催のパーティーで，東京のど真ん中のホテルの宴会場で堂々とシマウタを歌い，８月踊りをするようになりました。そうしますと，ホテルの職員も珍しがって，たまには輪に加わってくるという状況ですので，大いなる期待をしています。

【山田】今，平田市長から，以前は奄美の出身者の方々を取りまく社会の環境が大きく違っていたというお話がございました。鹿児島は事情が異なる部分もあるのかなと感じています。と言いますのも，以前から親睦団体の方々が，島の歌や踊りをやってくれております。実はこの後の懇親会に，奄美出身者の方々に来ていただいて，踊って頂き，歌っていただこうという趣向を用意しております。学生割引もございますので，是非大勢の方々にご参加いただきたい。こういう堅苦しい場からの文化発信ではなくて，もっと柔らかでソフトで，温かい文化発信そのものをご経験いただくのが，今日のシンポジウムの一つの目的だという事をご紹介させて頂きます。

【稲村】学生さんがたくさん来ておられますね。イギリスの場合は，旧植民地の大学で教鞭をとらないと本国の教授のポストに上がれないという慣行があります。ですから，鹿児島大学の学生には，奄美に行ったことの無い人には単位をあげないというルールを是非

作ってもらいたい(笑)。このシンポジウム自体も，もっと大々的に宣伝して，鹿児島でも奄美の事を真剣に考えている人たちが大勢いるんだということを是非広めてもらいたい。そういう意味では，先ほどの同郷会なんかも自分たちだけの慰め会ではなくて，大学のように地域のインパクトのあるところに進出してくるまでに力をつけてきた様に思えます。

会場からの発言――航空運賃など

【矢野】どうもありがとうございます。パネリストの方からいろいろなご意見，あるいは主張等を出していただきました。全体を通じまして，会場の皆様からもパネリストの方にお聞きしたい，あるいは私はこういう意見をもっております，と主張したい方がおられますでしょうか。学生諸君も，わたしはこういった体験をしたというようなところからでも結構ですので，発言してください。

〔航空運賃を下げられないか〕

【会場】私は徳之島町の出身で今鹿児島に住んでおります。徳之島の一番の魅力は闘牛だと思います。新聞などでみれば，韓国の闘牛は国営でやっていて，公的ギャンブルにもしているらしい。徳之島も誇りを持ってそういう仕組みを作らなければいけないと思います。また，先ほど稲村さんが言われていましたが，国でも県でも航空会社に融資をして，航空運賃をまず安くしなければいけない。運賃が非常に高すぎて沖縄に行くほうが安い。観光といえば奄美，徳之島に素晴らしいものがあるけれども，闘牛のよさなどを分かっていないので，団体運営なども整備されていない。交通も整っていない。そういう面でなんとかしたいと思います。

【矢野】はい，ありがとうございます。清成先生，今の運賃の件について，ご発言はありませんでしょうか。

【清成】そうですね，先ほど稲村さんがご指摘になった沖縄の航空会社の件ですね。実は，レキオス航空という会社を去年スタートさせようとして，できなかったんですね。たまたま会社を起こしたのが，法政大学の卒業生だった関係で，私はずっと相談を受けていたのです。

昼間に東京－那覇便を飛ばして，夜は物流で使おうと。特にベトナムまで含めてフル回転しようという事業計画だったんですね。それとは別に沖縄の自由貿易地域に日本第5のバイクメーカー案ができたんですね。これも法政大学の卒業生だったのです。そこで，2人の事業計画をくっつけたらうまくいくのではないかと，いろいろやってみたんですけど，結局この航空会社は最終的に資金不足に陥り，うまくいかなかった。認可は得たのですけども，駄目だったんですね。

〔島外の観光業者が潤うだけではダメなのでは〕

運賃の問題もですね。観光客が増えてくれば，自然にパック旅行で下がるのです。したがって，最初に起爆剤をどうするかという事が非常に難しいんですね。沖縄でも，地元側の計画として運賃を下げるなんていうのは非常に難しい。むしろ，東京なんかの旅行代理店のパック旅行を使えば安くなる。要するに，現地の宿泊からバスの手配から，全部含めて外部の観光業者の手にお金がおちるような仕組みにならないと安くならないんですね。それに対して，特別に料金だけを下げて，足りない収入を税金で補填することになると，補填する理由が見つからないんですよね。なんで徳之島だけという話に実はなるわけなんですよね。

〔グリーンツーリズムの提唱〕

それよりも，船を使うとか，いろんな旅行の仕組みを考えてみたらどうなのか。例えば，地元が計画したグリーンツーリズムみたいなものですね。それはスローでもいいじゃない

ですか。船で島々を回るとかいったようなことを，やはり地道にやっていく。そのツアーでは，河田さんにレクチャーを頼むとかですね(笑)。そういう切り口でやってみることも必要だと思うんですね。

【矢野】今の運賃の問題で，河田さんは世界中の島300ヶ所以上に行かれています。行こうとする際に，運賃というのが大きなファクターになるのですか。そこらへんをどうしていますか。

【河田】旅行ライターというのは沢山います。でも，島旅ライターとか島旅カメラマンがなかなかいない理由は，島の取材は運賃がかかるから。しかも，割引がない。太平洋の島などに行こうと思うと，ノーマルチケットで往復するものですから，コストがかかります。それに島の本というのは出してもらいにくい。予算も多い。そのため島は不利なのかと思っていました。

〔ＥＵの交通運賃施策〕

ところが，イギリスではイングランド，スコットランドに，ハイランドアイランド政策というのがあるそうです。陸上であろうが，海上であろうが同じ料金で運ぶというか，運賃です。ですから，海が時化た場合にも，船ではなくて，ヘリコプターであろうが飛行機であろうと，バス運賃の料金で移動することができる。では，差額の分はどこが払うか。ＥＵ全体で負担するという事を聞いたことがあります。それが即日本に可能かどうか分からないのですが，所変われば事情も違うというケースを体験してきました。

【矢野】ありがとうございました。山田先生どうぞ。

【山田】今会場からでているお話でございますが，実は奄美にいるJALの人間と話し合ったことがございます。この件ではいつも喧嘩になるんだと，そのご本人がいっておりました。その人は奄美の出身の方でございます。先ほどの河田さんの話ではないですけれども，飛行機会社としては決して沖縄を特別扱いしていないと，明言しております。運賃だけが奄美を高くしているわけだと思わないで，もっと先ほどから言われているようなアイディアをいくつも出すことがすごく大事だと。これは伝聞です。

それと，先ほど準備室で，交通とその利用スタイルについては稲村先生と激しくやりあいました。いろいろと言うけれども，飛行機に目を奪われすぎだ。海運でいえば，沖縄に行く船を牛耳っているのは奄美ではないか。つまり，奄美をあまり過小評価しないほうがいい。いろんな意味で力をもっている。沖縄という後背地を抱えているだけに，そこを利用して，逆に奄美はうまくやっている部分があるはず。こういう話で，やり合いになった場面がありました。

〔ソフトパワー――沖縄の平和教育〕

ところで，さきほど清成先生がおっしゃったグリーンツーリズム。これはソフトパワーの問題だと思うのですが，これについてはもっと反省して，奄美の方も独自性のある対処をして欲しい。私はある意味で怒りを込めて申し上げたい。1990年頃，沖縄，奄美を調べたんですけれども，あの当時にですね，奄美の手前なのですが，種子島，屋久島には年間５万人から６万人，高校生が修学旅行にきておりました。どうしていたのかというと，あの時期には施設がなくて，船で来て船に泊まるという。大きな船を１隻借りて来ているんです。そういう仕組みがあったわけです。その当時，ほぼ同じぐらいで沖縄と修学旅行を引き合っていたのですが，今では，種子島も奄美も修学旅行の話をあまり聞きません。その一方，60万～70万人の高校生が，沖縄に行っているというのです。

その沖縄での最大の呼び物は，一つは戦争についての平和教育。これはかなり高校交流をやっている。これが武器になっているのだということと，もう一つはサトウキビ。あのサトウキビの切り出しというしんどさが呼び物なんだそうです。だから，所変われば品変わるですが，奄美だってやれることは，もっともっと沢山あるのではないでしょうか。

【矢野】ありがとうございました。闘牛の振興や運賃の話を出して頂きました。これ以外に会場の方から，話題提供も含めて。はいどうぞ。

会場からの発言――奄振事業の問い直し

【会場】南日本新聞の杉原と申します。是非コメントして頂きたいのは，やはり奄美の経済構造を大きく規定している奄振事業についてです。

〔中央・県主導になってはいないか〕

平田市長も触れられましたけれども，これは位置づけが変わったとはいえ，残念ながら今おっしゃっているような観光主導であるとか，ソフトパワーというものに使われる性格にはなってないですね。非公共事業分野をもっと増やすべきだというのは，奄美現地ではかなり前から言われています。けれども，残念ながら奄振事業全体は，やはり中央省庁の主導によってつくられていると思います。そして，圧倒的に公共事業が多い。

〔島の環境容量が熟慮されているか〕

少し具体的に言いますと，最近加計呂麻に行かれた人はすぐ気づきますが，島の規模に不釣り合いな道路，港湾，トンネルまで今出来ています。これは何のために作っているのかまったく分からないんですね。これを主導しているのは，鹿児島県，大島支庁です。地元の市町村もかかわっていますけれども。

そういう所への資金投入は現地の意向とちがうんじゃないかと，僕は常々思っております。もちろん必要なところまで，お金を投資する必要は無いなどと言いません。島の環境容量を超えた，あるいは島が本当に必要している規模を明らかに超えて，コンクリートを用いたハード面の整備が進んでいる。これは，島を大事にするものが自分たちの足元を掘り崩しているという気がしてならないのです。このような考えについて，ちょっとご議論を聞かせ願えればと思います。

【矢野】ありがとうございます。今回は，第3回のシンポジウムになります。第1回目のシンポジウムで，この奄振の問題に焦点を当て討論をしておりまして，活発な議論がなされております。今回は文化の発信に焦点を合わせて企画をいたしました。では，この問題に詳しいパネラーのどなたかに，ご発言をお願いします。

〔危機感の共有と漸進的なアプローチ〕

【稲村】私は杉原さんのご意見に基本的に賛成なのですが，いざ，そのソフトになる部分，非公共事業をどう提案するかになると，絵がないんですよね。たとえば，旅行者向けの施設などがたくさん空いているというのは，私は知っております。これは奄美だけではなくて，全国津々浦々に渡るような話です。

そこにマリーン産業をどうするかとか，ある種のプランを作ってやりませんと，いつまで経っても動かないと思います。それが，大きなネックになっている。皆分かっているけれども，それをどう打開するかに危機感がなくて，あるいは，あっても一歩踏み出せていないのではないかと思います。是非，杉原さんですね，何か提案をしてください。私も同感ですから。奄振の現状を反対だ，駄目だと言うのではなく，徐々に変えていくという漸進的なアプローチが僕は必要なのだと思います。

文化の点だとか，いろいろなことで複眼的

に見て，経験的にやって，理論的には公共事業の方だっていろいろ言い分あると思います。経験的にどう克服するか，というのが私は大事だと思います。

地域振興をめぐる奄美と沖縄

【矢野】ありがとうございます。今日は清成先生もソフト面を強調されていました。それからやはり河田さんの話もソフト，心のようなところがあるかと思います。私自身もこの奄振が非公共事業，ソフトの方に使われていくのが良いのではないかと思います。平田市長からも一言。

【平田】奄振については，少し誤解があるのではないかと思っております。奄振法は，先ほども申し上げましたように，奄美地域における公共事業をどう進めていくかが，法の根本でございます。その基本性格の事業の中に，国土交通省が使える非公共事業という予算があって，その予算枠が増えないという議論になっているわけです。

〔奄振予算の使い方――地域資源を活かす〕

まず，あくまでも国土交通省が組んでいる予算の中の非公共事業部門の予算だということを理解してもらいたい。この予算の使い方の例を一つ挙げてみます。名瀬市は，地域の資源を生かすという事で，海の資源を生かしたタラソセラピーの施設を造っています。名瀬市はスポーツ選手の冬場のキャンプ地として，たくさんの事業団の選手が入っているのです。体を鍛える際の身体管理として，海水を温めた状態が温泉とは別の働きをする。これに着目して施設を造りたい。こういう場合には，国土交通省の非公共事業の予算を活用するということになります。

その一方，先ほど，奄美パークの話が出ましたが，この事業は国土交通省の予算ではありませんで，まったく別の補助事業ですが，これも非公共事業です。ですから，非公共事業を何もやっていないのではなくて，それぞれの省庁の事業を取り入れて，非公共事業に取り組んでいる。ソフトの組み入れ事業は進んでおると，私は思っております。一挙に解決していくというわけにはいきませんが，このことは，いろいろと現場を見られれば分かると思います。

〔奄美ミュージアム構想――自然と生活文化を活かす〕

次に，これからはどうするのか。先ほど申し上げましたように，奄美の自然を生かした，生活文化を生かした島興しをしようと取り組んでおるのが，奄美ミュージアム構想です。

これは名瀬市ではなく，奄美全部が入っている広域事務組合の手で進められております。これはですね，各島々，町村ごとに自分たちの周囲を見回して，これは大事なもの，宝だと思う物を全部拾い上げてもらう。何百件という候補が出て参りましたが，その中から抽出していって，重点を設定する。

現在では，それぞれの町村で，訪問者たちにその重点となった宝について語っていただける人を育成しはじめています。今，その段階にきております。

それと，先程の旅行者勧誘の件です。こういう会場で話しますと，何がいいよ，これがいいよということになって，それで終わっていることは間違いございません。先般の東京での奄美観光のシンポジウムでも同じことを感じました。

〔きめ細かな取り組みをやろう〕

エージェントの皆さんは一般的な話をし，それに留まっております。観光客を集めて送れるのかについても，エージェントごとにそれぞれ違った切り口で取り組んでいかないと解決できないのではないでしょうか。その際，現実問題として大きな仕掛けだと，多面的な調整の必要が生じます。これは島にとって一番難しいところです。多方面にわたり，多様

な催しに取り組んで，きめ細かいことをやっていかなくてはいけない。これは島の人達には苦手なことではないのか。これをどう克服していくか，と今思案しているところです。

かつては，大量生産，大量消費という時代がありました。しかしながら，これからの時代は，細かい事に配慮しながらやっていくことを求められるのではないのかと。

先ほど自然，動植物の話も出ました。時間がございませんので割愛させて頂きますが，多くの貴重な生き物，固有種があります。こういった情報をどう発信していくかは，重要な課題であろうかと思っておるところです。

〔南西諸島全体を視野に入れて〕

【稲村】沖縄と奄美の話になっておりますが，実は南西諸島には，種子島，屋久島という大きな島の他に，三島村とか十島村もございます。今日，十島村の関係者が来ておられるかどうかわかりませんが，私たちは十島村も忘れていないと，奄美の者が語っていたとお伝え頂ければ幸いでございます。

自然・文化を活かしたソフトパワー

【矢野】ありがとうございます。すでに，最後のおまとめに入りかかっています。清成先生，今日のテーマを深める観点から，先生のご意見をまとめていただければと思います。

〔ミュージアム構想――ドイツの小町村〕

【清成】先ほど市長さんのお話に出ていましたミュージアム構想，非常に素晴らしいと思います。山田学部長と私は，小さなドイツ関係の学会のメンバーであります。ドイツの小さな村や町には，生活文化と関係した美術館，博物館というか，ミュージアムがあるんですね。それを，ドイツのバーデンヴェルテンベルク州などでは１冊の本にしたり，地図にしたりしているんです。その全体を合わせると，ものすごい量なんですよ。それに通じる事業を各市町村で協力して進めるというのは，大変素晴らしいと思うのです。

〔森林文化の里構想――長野県蓼科町〕

私の経験を少しお話します。長野県に蓼科町という町があります。そこに大学の人たちが住む別荘地がある関係で，そこの町の観光計画というのを作ってくれないかと頼まれました。それで，高校の地理の先生を連れて，町を調べたんですね。そしたら，１つの町で標高差が2300メートルあるんです。ものすごい資源なんですね。なぜ地理の先生を連れていったかというと，頂上に近いところに，ちょっとつついても環境がこわれる地帯がある。林道をつくるなんてとんでもないという場所があるんですね。その一方，保全しながら開発してもいいよ，という地帯もある。これらを全部仕分けて提案する必要があると考えたからです。

実は，標高差の2300メートルというのは，気候の面からいえば，日本列島の南から北までが１ヶ所に集中したようなもので，植生がものすごく多様なんですね。

そこで，われわれは森林文化の里というような構想をたてました。水源保全林の大事さと，森林文化について，子供たちに教えるという学習観光の場にしようという提案をしたんですね。バードウォッチングとかいろんなものを含めた構想なんですけれども。

〔奄美――学習観光の提唱〕

奄美の場合は，亜熱帯の気候風土，多分マングローブの林なんかもよく残っていると思うんですよね。

そういう自然などを題材にした学習観光を中心に据えて，地元の人たちが研究し，レクチャーをするやり方がよいのではないでしょうか。その際，動きのあるミュージアム構想がすばらしいと思います。それが本来の観光。国の光を見るというのが観光ですから，そういうのが本当の観光ではないですか。それに付随して，いろんな産業が興ってくるだろうと思います。これが，私は内発的な発展だろ

うと思っております。私は大いに期待しています。

【矢野】それでは河田さん。

〔島の中で語ろう〕

【河田】いつも思うのですが，島をテーマに何かを語るとき，島の外に居て島を語るのではなくて，島で語りたいと思います。360度島の空気に包まれると，やはり島が何かなと考える際も，体全体で感じ取れます。インターネットは発達してきたけれども，それはあくまでも道具であって，やはり人と人とが顔を見合わせて会話をする。そこから何かが始まるというのを，いつも思います。皆さん，是非奄美の島々にお出かけ下さい。

【矢野】それでは最後に，山田先生。

〔ソフトパワーを活かしきっているか〕

【山田】シンポジウムを仕掛けた側として，どういう課題関心で出発し，何が語られたのかについての整理も必要かと思っております。まず平田市長に申し上げたい。市長の発言は，確かに公式文書としては立派な回答でございますが，やはり，私は杉原さんがいわれたような現実は，島のあちこちにある。とりわけ，ソフトパワーがそれに見合うほどに活かしきれているか。私は活かせていない現実を現実として，やはりリアルに見なければいけないのではないかと思います。そうでなければ，やはり都会の人が，われわれの血税を有効に使っているかと批判するのに対して，有効な反論ができない。

〔奄美の「売り」は何か〕

これをはっきり確認した上で，今日の話は，国際的な文化発信に何が欠けているのかを考える場だったのではないか。奄美の「売り」が生活文化や自然・風土だという点を共有できたのではないでしょうか。その一方，俗な言葉を使えば，生活文化というもので食えるのか。これから観光，島の外の方々をお呼びできるのかどうか，という問いかけを議論しなかったのではないでしょうか。ここから後は私見にすぎません。

外の世界の方を呼べるかどうかは，外の世界の人たちがどう考えるか次第です。ただその目で見てもやはり，先ほど稲村先生が少し言われたように，あるいは平田市長もいわれました，大量生産，大量消費という時代は終わり，私の使った言葉で言えば，「癒し」を求める動向が先進国の間で，日本だけではなくて，強まっていく時代ではないのかなと，感じています。

〔奄美の「見せる文化」の自覚〕

それで，奄美もうまくいくのかと問われたならば，私は違うと思っております。外部の動向とうまく合致するには，奄美はもっと能動的な努力が必要だと考えています。

この点をもう少し補足します。生活の文化というのは，本当に突き詰めると，観光客と生活者が交錯する場所をどう見つけるかという難しい問題を抱えるわけでございます。生活を犠牲にしてまで，観光客に見せるのかどうか。この点はかなり重要な問題でございます。

一方で，奄美の中に「見せる文化」というのが育ちつつあるという気が致しております。典型的に言えば，シマウタもコンクール形式でどんどん発展している事実がございます。こういう面をどう考えていくのか。この動向は年輩のウタ者の方々にはあまり肯定的に見られていないと聞いております。しかしながら，外から訪れる人間にとって，見やすい機会が作られるのを，あまり否定的に考えるのは如何なものでしょうか。

もう一つは，「元ちとせ」に代表されるように，メジャーな文化の世界に奄美の出身者の方々が相次いで登場する時期を迎えている。その事自体が奄美に対する関心を大きく高めているのではないかという気が致しております。

〔シマウタの可能性〕

最後でございますが，稲村先生が経験を積み重ねてなどと，穏やかな話をされるとは，思っておりませんでした。ああいう事を言われてびっくりしたんですけれども，実は奄美のシマウタという一つの例をとっても，その中でも伝統的な歌い方に満足しないで，外の方にも分かる音楽をやりたいという若手がどんどん増えています。西洋楽器の共演も次第に当たり前になりつつあります。

それから，私たちはシマウタを聞いても言葉がわかりません。これについては，私たちの分かる言葉でシマウタを歌ってくださる方々も現れています。これらは伝統的なウタ者から見れば，正統ではないのでしょう。

しかしながら，この動向は奄美と深く付き合っていない外の方も，奄美を理解できる素地を大きく広げているというのが私の理解でございます。そういう新しい潮流をもっともっと育てていけば，時代の風は奄美に向っているのではないかと，非常に楽観的な希望をもっております。

【矢野】どうもありがとうございました。最後はまとめようと思ったのですが，山田先生が話した後に，別な角度からまとめるのは難しい。ですから，私はこれ以上話しませんが，今日のシンポジウムにはそれぞれ５人の先生方がお忙しいにもかかわらず鹿児島に来て頂きまして，奄美の魅力，そして奄美はどうしていけばいいのかを語ってくださいました。最後に山田さんからは重い重いこれからの課題提起だったと思います。会場からもっともっとご意見を頂きたかったのですが，進行の不手際等もあり，皆さんのご意見をたくさんは引き出せなかった事を申し訳なく思います。５人のパネリストの方に，お礼を込めまして拍手をお願い致します。（拍手）

－分科会報告者と報告タイトル－

＜第１分科会＞　行政，産業・経済と環境ガバナンス

・釆女　博文（司会・責任者）

・北崎　浩嗣（法文学部教授）

「喜界島におけるゴマ生産の現状とその将来性」

・山本　一哉（法文学部助教授）

「奄美経済と黒糖焼酎産業」

・朴　源（法文学部助教授）

「奄美の財政」

＜第２分科会＞　農業と自然からみた環境ガバナンス

・北村　良介（司会・責任者）

・菅沼　俊彦（農学部教授）

「奄美の農産物と特産品開発」

・津田　勝男（農学部助教授）

「脱農薬型の害虫防除」

・地頭薗　隆（農学部助教授）

「屋久島の自然」

・西　隆一郎（工学部助教授）

「サンゴ礁海岸の安全利用について」

＜第３分科会＞　人間，社会，文化と環境ガバナンス

・桑原　季雄（司会・責任者）

・大橋　愛由等（図書出版まろうど社）

「奄美戦後史とディアスポラ」

・田畑　千秋（大分大学教授）

「奄美における民族文化の変容と開発」

・前利　潔（知名町役場職員）

「作家と島人・すれ違うまなざし」

・花井　恒三（奄美群島広域事務組合事務局長）

「奄美における観光と開発」

＜第４分科会＞　高等教育のサテライト・遠隔地教育

・萩野　誠（司会・責任者）

・大泉　英次（和歌山大学教授）

「地方型サテライトの課題：和歌山大学紀南サテライト」

・曾妙慧（淡江大学助教授）

「台湾淡江大学における遠隔教育」

・萩野　誠（法文学部教授）

「鹿児島大学奄美サテライト教室の理念と展開方向について」